



**Data**

監督・脚本: キム・スノウ

出演: イ・ヨンエ/ユ・ジェミョン  
/イ・ウオンゲン/パク・ヘ  
ジュン

---



---



---



---



---



---

## 👁️👁️ みどころ

愛する幼い息子が、ある日突然、失踪！息子は今どこに？そんな息子を探し続ける母親の物語は、人の心を打つ名作が多い。

米国の『チェンジリング』（08年）、中国の『最愛の子』（14年）に続いて、13年ぶりに復帰した女優イ・ヨンエの主演で、韓国にそんな本作が登場！

韓国映画はハードさ（エグさ？）が特徴だが、その是非は？“予定調和”は願い下げだが、ここまで悪人ばかり登場させるのも如何なもの・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■なぜ息子が失踪？テーマは“母の愛”■□■

母の愛は強し！失踪した我が子を探し続ける母親の姿をテーマにした感動作には、アンジェリーナ・ジョリー主演の『チェンジリング』（08年）（『シネマ22』51頁）や、ウィッキー・チャオ主演、ピーター・チャン監督の中国映画『最愛の子』（14年）（『シネマ37』177頁）等がある。『リング・ミー・ホーム 尋ね人』という邦題を見て、本作はそのテーマの韓国版！そう思ったし、そう確信したのは、『最愛の子』に登場した「行方不明児を探す会」と同じような、「行方不明家族捜索の会」が登場するからだ。

6年前に公園で失踪した、当時7歳の息子ユンスを、元高校教師の夫ミョングク（パク・ヘジュン）と共に、今なお捜し続けている母親ジョンヨン（イ・ヨンエ）。今日は「行方不明家族捜索の会」のスンヒョン（イ・ウオンゲン）と共にある母子の元を訪れ、息子が4年間行方不明だったという母親の話を聞いたが、残念ながら具体的な成果はゼロ。ジョンヨンのユンスへの想いは募るばかりだ。

### ■□■韓国映画のハードさ（エグさ）は？その是非は？■□■

韓国映画は良くも悪くも“ハード”なもの、別の言い方をすれば、“エグい”ものが多い。本作のテーマを提示する導入部は静かな滑り出しだったが、ある通報を受けたジョンヨン

が、ミョングク運転の車でそこに向かう途中、いきなり交通事故に遭い、ミョングクが死んでしまうことに。この交通事故の様子は“エグい”うえ、事件の原因もかなりエグい。幸い(?) ミョングクには多額の生命保険金が出たようだが、今度はそれを目当てに訳の分からない情報提供がされてくる展開を見ていると、さらにアレレ……。韓国社会の実情(?) は、かなりエグいようだ。しかし、ユンスには桃のアレルギー、耳の後ろの斑点、やけどの痕、そして足の小指の副爪等の特徴があったから、目撃された少年にそれと同じ特徴あり!とされると、ジョンヨンは矢も楯もたまず……。

本作の主な舞台になるのは“マンソン釣り場”だ。日本にも同じような施設があるが、この釣り場を営んでいる老夫婦や、夫を亡くしたギョンジヤとジホの親子らは、みんな怪しそう。その上、地元警察のホン署長(ユ・ジェミョン) やその部下らは、その経営(利権?) に相当関わっているようだから、ヤバイ。さらに、そこで働いている幼い子供たちは、ホントにこの親の子供なの?それとも……?

しかして、ある日、ジョンヨンは多額の謝礼と引き換えに得た“ある情報”に導かれて、この“マンソン釣り場”に向かったところから、本格的ストーリーが展開していくことに。

### ■□■美人女優イ・ヨンエの13年ぶりの復帰作だが……■□■

本作でジョンヨン役を演じたイ・ヨンエは、TVドラマの『宮廷女官チャングムの誓い』で超有名な女優。映画では、『JSA』(00年)での凛々しい美人将校役(『シネマ1』62頁)と、『親切なクムジャさん』(05年)(『シネマ9』222頁)の怪演で、私も注目していた女優だ。そんな彼女は結婚、出産を経て13年ぶりに復帰し、主演作に選んだのが本作だが、かなりエグい(?)ストーリーの本作では終始暗い表情ばかり。失踪した息子ユンスへの深い愛情とまだ生きているはずだとの信念、そしてその捜索のためならトコトン何でもやってやるという根性はよくわかるが、いくら何でも、本作中盤からクライマックスにかけてのハードな展開は如何なもの?

目下、日韓関係は最悪だが、日本人の目には、韓国側(人)の対応はあまりにもあまり……。そう思ってしまうが、本作のような警察署長を含む悪人たちがばかりを見ていると、それもありません。ついそう思ってしまったが……。

### ■□■脱走劇のスリルとサスペンスは?その結末は?■□■

『大脱走』(63年)や『パピヨン』(73年)のような本格的な「脱走モノ」が面白いのは当然だが、ミンスを連れてマンソン釣り場から逃げ出したジョンヨンの脱走劇は如何に?本作後半のスリルとサスペンスはそれだが、さて、その結果は?

これにて「ジ・エンド」とならないのは、さすが若手監督キム・スンウの演出だが、ラストに見る、あっと驚くどんでん返しへの賛否は如何に?「ネタバレ厳禁」は、ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)を含めて、この手の韓国映画の常套文句だから、これ以上は書けないが、これはいくら何でも少し技巧に走りすぎでは……?

2020(令和2)年10月5日記